

歴史とは 2

歴史とは 24

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 303

日本の歴史に

先に述べたごとく 東進したユダヤ民族ユダヤ部族の先鋒は鵜草葺不合皇朝の末期には続々と日本に到達した。 彼らはその経済的才能を持って 国家の各機関に入り込み、更に日本の皇室とも深い関係を持つようになった。

それまでの日本は 言霊布斗麻邇の原理に基づく、道義政治の時代であったが、世界が生存競争の時代に突入した今、日本において布斗麻邇の運用を続けることは、今後の世界の物質文明促進の目的に妨げとなる。

また 鵜草葺不合王朝の末期に、日本全土に大地震が起こり、その文化の大破壊があった（竹内文献）ためもあって、日本の政治の宏漠に大改革が行われた。その現れが神倭朝の誕生である。この王朝の出現を契機として日本は神代から現代へ、王道政治から権力政治へ、神皇時代より人皇時代へと変貌する。その大綱に則って即位した初めの天皇が神倭伊波礼肥古命（かむやまといわれひこのみこと）即位すなわち神武天皇であった。

神倭王朝の統治の目的は次の如く要約することができる。

- 一、神代における政治の原器である言霊五十音布斗麻邇の原理をある時まで日本民族の意識の表面から隠没させること。

二、将来人類の第二の文明である物質科学の完成の時、再び要請される第一文明である言霊原理が

民族の意識に甦るためのよすがとなる諸施設を予め用意しておくこと。

三、権利の隠没により当然招来される、であろう権力政治時代の生存競争・人心の混乱の事態に対処

するための手段としての諸信仰の樹立・輸入

四、日本古来の文字を廃し、物心両文化共外国よりの移入によって民族の需要を賄うこと。

その 304 につづく

歴史とは 2

歴史とは 25

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 304

道義政治の基礎である言霊原理を隠没させた実際の実行者は神倭朝十代崇神天皇であった。それより以前帰化したユダヤ人の血が神倭朝の皇室に入ったことが推察される。神武天皇の皇后は帰化人だとも言われる。

このように神倭朝の発足の経緯には種々の謎がありまだ明確ではないが、ただはっきりしていることはこの王朝の発足を契期として日本皇室の精神・国是の大綱に大変革が起こったことである。この謎を解明しようと神霊憑依の形で先鞭をつけたのが近代における民間宗教の天理・大本の教祖であった。

高山の真の柱は唐人やこれがそもそもの神の立腹。（天理教教祖お筆先）

大千世界一度に開く梅の花、梅で開いて松でおさめる神国の代になるぞ。今の世は 獣の

世であるぞ （大本教教祖お筆先）

高山の真の柱とは天皇のことであり、その天皇が実は古代からの日本人ではなく外から入ってきた外国人であり、そのことがそもそも日本古来の神々の気に入らぬ事だ、というお告げである。

その 305 につづく

歴史とは 2

歴史とは 26

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 305

この天理教教祖のお告げは天照大神の心神霊として出てくる。次の大本教教祖の御告はくにとこたち国常立命の神霊憑依による。国常立命と言霊工であり、「梅で開いて松で治める」永遠とは前著「言霊」で書いた（ウからア・ワに分かれる）で現わされる。言霊の造化三神の構造を示したものであり、

神武以来現代まで人類は人間が人間たるべき精神の構造の原理を失った弱肉強食の獣の魂の世  
の中であり、近いうちに言霊の原理が蘇り、人間は神聖を取り戻して世界は神の国になるというお告げ  
である。以上のお筆先によって神倭王朝樹立に際して日本の皇室の人脈・霊脈ならびに国是の大変革  
があったことが了解される。

日本書紀崇神天皇の章に、「是より先に、天照大神・倭の大国魂 二柱の神を天皇の大殿（みあら  
か）の内に並祭る。然してその神の勢いを畏りて、共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以て  
は、豊入鍬姫命（とよいりすきひめ）につけ託（つ）けまつりて、倭の笠縫の邑（むら）に祭る。仍（よ）  
り磯堅城（いそかたぎ）の神籬（ひもろぎ）を立つ。…」と着記せられている。この事件を同床共  
殿の廃止という。日本書記天孫降臨の章に「吾が兒、この宝鏡を視まさむこと、當に吾を視るがご  
とすべし。共に床を同じくし殿を共にして、斎鏡（いはひのかがみ）とすべし」という天照大御神  
の命令がある。

崇神天皇までは天照大御神である三種の神器の一つ八咫鏡は天皇と同床共殿であった。すなわち天皇は言霊五十音布斗麻邇の原理の体得者であった。その鏡を天皇の手許から離して神として祭ったということは、言霊の原理を政治の基本とする古代の大方針を廃止したことを示している。

その 306 につづく

歴史とは 2

歴史とは 27

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 306

爾来 道義政治創造の原器であった五十音言霊原理は次第に日本民族の表面意識 から忘却され、ただ信仰の対象である天照大御神として礼拝されるのみとなった。先著「言霊」に説明されたごとく、「五作（いつき）」（斎）の神より、おろがむ（拝む）神になった。と同時に 五十音言霊の体得者として道義政治の直接実行者であり責任者であった日本天皇は、この時より日本民族の宗家としての即ち

天照大御神の血統を継いでいるというだけの信仰の対象としての天皇となったのである。

同床共殿廃止の方針は神倭朝初代神武天皇の時に計画され、六百年後の十代崇神天皇によって  
実行された。この同じ意味の治績によって 両天皇共「初国知らしし」天皇という贈名が付けられている。

言霊原理の隠没の施策のと共に、その隠滅の期間当然起こるべき世界の人々の精神の荒廃に対処し、  
さらに人類の第二文明である物質科学の完成の時、人類の意識に蘇る第一文明の言霊原理を理解し  
やすくするための準備の施策も着実に実行されていった。

その 307 につづく



まずは先に記した孔子・老子・釈迦の来朝による 儒・仏教の創始に続いてイエス・キリスト来朝によるキリスト教の創設である。イエスの来朝は第十一代 垂仁天皇の御宇である。イエスは 先輩モーゼと同じく日本皇室より神道を学び、故国に帰ってその教えを「山上の垂訓」の形で民衆を教化した。

その 307 につづく

歴史とは 2

歴史とは 29

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 307

イエスに与えられた命令は以後二千年の将来蘇るであろう古代さながらの愛と英智の道義世界を迎えるための世界民衆の心の準備を解くことであった。「主の道を直くせよ」の叫びである。「悔い改めよ、

天国は近づけり」の 教えである。

神足別豊鍬天皇からモーゼに与えられたヘブライ民族の団結と世界各民族の 背後に立って全世界を  
権力によって統一せよという命令がキリスト教において「旧約」と称せられるのに対し、垂仁天皇よりイエ  
スに課した人類愛精神の普及の使命をキリスト教で「新約」と言う。この旧約と新約が完成される時が  
言霊原理復活の条件となる ということができる。

ここで参考のために附記すべきことがある。 世界の大宗教である仏教とキリスト教はその教理が全く異  
なっているように思われている。 しかしこの著において示している如く両宗教を創始した原型である  
言霊太占の原理により見る時、それらの両教の教理が同一の構造であることである。

イエスの弟子であるペテロやパウロは実在の人間イエスを理想化し、神の子としてのキリストを信じ、それを自己において証明することによって愛と智の人間の本性を悟り真の自我を確立する方便の教えを確立した。これがペトロの樹てたカソリックの教理である。

山上の垂訓はイエスの自身の教えであるが、イエスを神の子イエス・キリストとして信仰することはカソリックの方便としての教えである。仏教も同様であり法華経・惟摩教・般若心経等においてその宗教教理を説くと同時に 無量寿経・阿弥陀経に於いて 阿弥陀如来の極楽浄土を方便として示すことによって信仰と自証を求めたのである。

日本の天皇の言霊原理による人類歴史の創造という立場より見る時、一見異なるように見られる世界の宗教も同一目的の下、類似の構造を持っていることが明瞭となるわけであり、そのことから人類の歴史創造の淵源（えんげん）を伺うことができるであろう。

その 308 につづく

歴史とは 2

歴史とは 30

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 308

生きている人間の精神構造である言霊五十音布斗麻邇原理は隠没され、その代わり伊勢神宮に天照大御神として祭られることとなったが、時きたり将来原理の人間意識への蘇りの時に備えて、神宮の本殿の建築様式は五十音言霊図特に天津太祝詞音図かたどる形に設計されている。

「一心の霊台、諸神変通の本基」（神道五部書）と言われる本殿中央の忌柱、氷木（千木・道木）・鯉木（数招）（かずおぎ）の形や数、階段の段数等と五十音図の象形である。さらに後世二十年ごとに神宮本殿の建替えをする遷宮の制度を設けることによってその構造の意義を失うことのないように計画されたのである。

また伊勢に内宮と外宮がある。内宮は日本の神である天照大御神を祭り、外宮は外国の神を祭る。豊受大神宮である。祭神豊受毘売の神とは御食津神（みけつがみ）であり食べ物を神と言われる。言うまでもなく天照大神の聞（きこ）しめす食事のことである。

須佐之男命は精神の神髄である姉神天照大御神の元を離れ、物質研究の旅に出て、その成果を携えて姉神の住む高天原日本に参上して来る。その物質探求の諸成果こそ天照大御神の食事である。

伊勢の内宮内外宮の存在は織姫・牽牛の七夕の祭りと同様の意を持っている。（伊勢皇大神宮の言霊学的構造については先著「コトマタ学入門」参照のこと 言霊原理開頭 に備えての施設やその他いろいろある。

まず宮中の儀式のほとんどは言霊学的表徴としての意義がある。例えば立太子の儀式の中に「壺切の儀」があるが、これは葦不合皇朝王朝まで皇太子として立つには布斗麻邇の原理を体得している人でなければならなかったが、原理隠滅後はそれを表徴して五十音の真名の素焼板の入った壺を開けて中身を確認する儀式として残したものであった。

奈良時代古事記・日本書紀の撰上が行われた。記紀の神代の巻きは歴史ではない。神名や過去の天皇名を引用して言霊五十音による人間精神構造を神話の形によって呪示したものである。後世人が一度言霊の存在に気付き、各神名の呪示を基礎として自我の精神内部を観察するとき、明らかに五十音言霊の実体に近づくことができるように編纂されたものである。この書前編を読まれれば明らかに了解されるはずである。

その 309 につづく

歴史とは 2

歴史とは 31

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 309

言霊原理隠没時代の社会の精神興廃に備えて、それまで宮中の儀式であったものを民間に移した神社神道の創設や、外国よりの仏教・儒教の宗教の伝来の促進、外国芸術の輸入等種々の方策がとられた。これらは皆月読みの活動である。

葦不合皇朝末期以来来朝帰化するユダヤ人の数は次第に増大し、日本社会の各分野に重きをなしていった。特に産業・経済の才に優れ、日本の経済の実権を掌握して言った。これは現代まで続いている。



この状勢に鑑み 允恭天皇の御代日本の姓別の調査が行われた、 神別・皇別・藩別の三姓に分けたと伝えられる。秦・波多野・呉羽・服部等はその当時の藩別姓であった。帰化ユダヤ人は元12部族のうちの祭紀を司るレビ族の流れであったから信仰に厚く、彼らの神の故郷である日本の神宮と皇室に忠誠であった。伊勢神宮の建築に協力し、下っては奈良平城・京都平安の都の建設は彼らの力に依るところが大きかった。現在見るが如く奈良・京都のマス目の通った街並みの設計は彼らの旧都とエルサレムを原型としてこれを写したものである。

彼らのある者は朝廷の中に入り、また日本有数の氏族と婚姻によって結ばれていった。東の漢（あや）の直駒（あたひこま）は推古朝の大臣となった。また彼らの末は着実に日本の経済を掌握し、浪花・近江・甲斐等の商人として栄えたのである。

日本と帰化ユダヤ人との関係において特筆すべきは聖徳太子の治績である。日本神道の奥義を知り、さらに儒仏の知識に精通していた太子は帰化ユダヤ人の由来を承知した上で種々の政策を行った。

京都太秦（うずまさ）に彼らの活動の根拠地として広隆寺を建てた。太秦（うずまさ）は漢音でダージと読み、東ローマ帝国のことである。その寺院内に十二の井戸があったという。その井戸の石に伊浚井（いさらい）の文字が見られ、現存は三個である。伊浚井はイスラエルであり十二の井戸は十二部族を表している。さらに寺内に酒公なる人を祀った大酒神社があった。大酒は大辟（おほさけ）の転下であり、それはダビデの漢音名である。

仏教では 正法千年像法千年末法千年といわれる。日本においては神武天皇より崇神天皇までの六百年が正法時代ということができよう。言霊原理の政治の香りがまだ濃く残っていた時代である。同床共殿制度の廃止以後現在までの二千年が像法末法時代であった。

第二の物質文明を促進するべき方便として生存競争の時代の精神荒廃に備えて最小限の慰安が必要であり、先に述べた如く神道の創設や儒教・仏教の輸入、下ってはキリスト教の導入もその為であった。それら宗教の導師の中には修行の行程において言霊布斗麻邇の原理の存在に気づいた人たちも二、三に留まらなかった例えば 柿本人麿・菅原道真・役小角・弘法・伝教・日蓮等はその最たるものである。

それなら人々が遺した書物を見れば、彼らが歴史における天皇の経綸とその創設の原理の存在を自覚していたことを明らかに読み取ることができる。真理の存在を知っていて、しかも明らかに説くことがなかった。説いてはならぬ時代であることを知っていたからである。像法末法の時代にはかくの如き仏教の所為菩薩が活躍した。但し麻邇に精通しそれを説く仏陀は生まれなかった。仏陀は存在してはならない時代だったのである。右のごとくの調査として日蓮の三沢鈔を下にあげておく。

「我につきたりし者どもに、真の事を言わざりけると思いて、佐渡の国より弟子ともに内々申す法門あり。これは仏より後、迦葉・阿難・竜樹・天親・天台・妙楽・伝教・義親等、大人師は知りて而もその心の中に秘めさせ給ひて、口より外に出し給わず、その故は仏性として言ふ、我滅後末法に入らずば此大法言ふべからずとありし故なり、日蓮はその使にはあらねども其の時刻に当あたる上、存外に此の法間門を悟りぬれば、聖人の出でさせ給ふまで、まず序分にあらあらと申すなり。然るにこの法門

出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出て後の光、巧匠の後に拙なき知るなるべし。

この時には正像の寺堂の仏像僧等の靈驗は皆消え失せて、ただこの大法のみ一闇浮堤に流布すべしと

見えて候。」

その 310 につづく

歴史とは 2

歴史とは 32

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 310

外国の歴史 三

イスラエル・ユダヤ両国家滅亡ののち東に進んで彼らの師モーゼの魂の故郷に故郷日本に向かった信仰的

なレビの一族とは反対に、他の部族は西に向かって民族移動を開始した、東漸（とうぜん）のユダヤ

がアベルの末なら西に向かったユダヤ人はカインの末ということが出来る。西漸（せいぜん）した部族はま

ずヨーロッパに入り諸民族の背後に立って生存競争を助長し、その社会の中で漸次第二文明である科学の研究を推進して行った。

先に高原日本から出発して行った須佐之男命・月読の命の活動のもとに、産声を上げた東洋古代の科学である東洋医学・本草学・煉丹還金術等は初め東漸のユダヤに受け継がれ次第に発達し、更にシルクロードを通してアラビア人に伝わりアルケミーとなった。近代科学の嚆矢（こうや）「物事の始まり」であった。

中世より近世にかけて物理学・化学・天文学・植物学の物質科学ならびに諸人文科学は次第に進歩の速度を速めていったのである。

かくしてここに二・三千年の人類の歴史は、戦乱の連続であり、戦争の合間に人々は束の間の平和を憩うというのが実状となった。古代中国に於ける堯・舜（ぎょう・しゆん）の治政下の鼓腹撃壤（太平の世を楽しむこと）など形容詞は完全なユートピア的物語となった。各民族の神話が伝える王道楽土の時代がこの地球上に永続していたという事実を人々は忘却してしまったのである。

人間とは何か、の究極構造の自覚である アイウエオ五十音言霊の立場から見ると、世界を貫く第一義の歴史は神であり仏陀である覚者・聖としての天皇が計画し転輪する文明創造の歴史であり、哲学的に言えば言葉の言葉であるロゴス発展の歴史である。

それがあつた日を境として経綸創造の第一義としての歴史の表面に虚しい泡沫の如き第二義的な苦悩に満ちた葛藤の歴史の相が現れ、人はついにその葛藤の因果宿業の関係のみが歴史であると錯覚してしまつたのである。

栄枯盛衰のこの時代各国の王たちは富国と同時に強兵に奔走した。強い軍隊を持つことは国家の存立に欠くことのできない条件であつた。強兵のために優秀な武器が必要である。なるべく大規模な生産設備が必要となる。大国となるためには産業の興隆と軍備の拡張は必須の条件となる。

かくて数千年にわたる須佐之男命の意図である生存競争場裡に第二の物質文明を創造する活動は



着実に成果をあげ、ヨーロッパにおけるルネッサンスならびに産業革命をへて、物質科学の華が咲く時代を迎えるのである。特に第一第二次の世界大戦を契機として物質科学の研究はその極点に達した。世界文化の物質科学変貌は目を見張るものがある。戦争が物質科学研究を促進させるための必要悪だという主張がこの時ほど真実性を持つ時代は他にあったであろうか。

その 311 につづく

歴史とは 2

歴史とは 33

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 311

二十世紀

十九世紀の終わりに近く科学の目が初めて物質の最小単位である原子の中に向けられた。原子物理学の誕生であった。今世紀に入り原子物理学の進歩は目覚ましく「物」とはなんであるかの研究が進展し、原子核内エネルギーの解放である原子爆弾の日本への投下が行われ第二次世界大戦は終わっ

た。

ニュートン物理学から量子物理学へ、原子核内の探索は飛躍的發展を遂げた。二十世紀前半は原子物理学の時代であった。今世紀後半は宇宙物理学の 擡頭（たいとう）となり、人類の宇宙時代が始まった。生物学の分野にも新しい光が差した。生命の生物学的解明は急速に進みつつある。分子構造の研究は自然の中では存在しない幾多の便利で安価な「代用品」の大量生産に成功している。いわゆる「ハイテク」の開発は人間社会の生活を一変させ、今は歴史的に例をみない産業革命が日々刻々進展しつつある。

須佐之男命すなわちエホバの意図である物質文明創造の進展は以上の如くであるが、そのもう一つの意図である大国主命の「国引き」の仕事すなわち権力による世界統一の業はどうなっているであろうか。

西漸のユダヤ民族は各々ヨーロッパに根を張り、その知力と経済力と以て各民族・各国家の中枢に入り徐々に力をつけ、中世をへて産業革命やヨーロッパの植民地主義に乗って、いよいよその影の権力を振るい始めた。彼らには国家はない。領土も持たぬ。しかし各民族の中に入って数千年の間彼らはユダヤ人独特の信仰と教育を捨てず団結を失わず、その特性である学知力と経済力を以てその住む所の国家政治に隠然たる影響力を常に保持した。

その活動の中心はイタリアよりドイツ・ベルギー・オランダ・フランス等と次々に移り第二次世界大戦終了前後には英国がその根拠地であった。彼らが活動の基地を置く国は必ず繁栄した。世界の中心があたかもそこにあるが如き活況を呈するのである。そしてその国の経済は彼らの藁箒中のものとなった。その繁栄した国家・民族の経済力・権力を自由に操ることによって彼らは世界の経済全体の掌握を意図する

ものである。

第二次世界大戦を契期としてユダヤは根拠地をアメリカ合衆国に移した。ニューヨークのウォール街を中心とした世界経済の操作が一段と進み、その手足である各種国際企業はますますその実力を膨れ上がらせる。数千年の中華思想を以て任ずる中国も、石油の産出国を武器に勢力を張ろうとしたアラブの民族主義も、その他大戦以後続々と独立を果たした各民族国家の国粹思想も、次々と彼等の経済的圧力によって懐柔されていった。

彼らはその勢力を駆って「国引き」の最後の目標であるロシア・ソビエト連邦に対する包囲網を刻々としめつけていった。資本主義・民主主義・自由主義なる言葉は彼らの思想的武器である。この思想の武器と

膨大な経済力を以て彼らの国引きの事業の完成は目睫の間に迫っている。そして近年の世界の共産体制の全面的崩壊となったのである。

かくて葦不合皇朝王朝の神足別豊鍬天皇がモーゼに下した命令「第二文明である物質世界の解明と経済と権力による世界の統一」の業は二つながら完成まで今一步のところに来たのである。

その 312 に続く

歴史とは 2

歴史とは 34

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 312

現在の世界

三千年の昔東漸のユダヤ部族は日本に到着し、その経済運営の才を生かして日本に根を下ろし、人種的に全く日本民族と同化して常に国家の枢密と関係を持った。第二次大戦以後は日本が敗戦の惨状から立ち上がり世界が奇跡と呼ぶ経済復興を遂げたのも彼らの後裔の力である。日本はアメリカに次ぐ世界第二の経済大国にのし上がった。

一方西漸のユダヤは三千年にわたる世界放浪の間に、各国の各民族の背後に立ちながら彼らの経済力・知的実力を持って各国の実験を牛耳り、今やその活動の拠点をアメリカ合衆国に置き、表面の手足として各種の国家企業を持ち、その上各国のマスコミ界の内部に強い影響力を行使することによって国際思想の操縦を行ない、経済的・思想的に世界統一の事業を着々と進めつつある。

さらにその成果引っさげて彼らの先祖であり預言者であったモーゼの魂の故郷日本に向かって太平洋を渡

る準備を大規模にそして慎重に整えつつある。その目的地日本にはすでに三千年前に渡来しその地に定着している東漸のユダヤの末裔が待っている。東漸と西漸のユダヤが「東にてエホバを崇め海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名をあがむべし」（イザヤ書）「彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん」（ダニエル書）と預言者に約束されたこの日本において再開する日は極めて近い。

この事はここ最近の日本とアメリカとの関係を考えればなるほどと首肯されるであろう。両国が幾多の経済摩擦を起こしながらそれらを徐々に乗り越え、産業・経済や学問研究の分野に共同合併の体制を着々と備えつつある事である。日米のパートナーシップが完成するならば、その国際的影響力がいかに強大になるか計り知れないものがあるろう。

以上のごとく葦不合皇朝六十九代神足別豊鍬天皇がユダヤのモーゼに下した命令「物質的の第2文明の創造とそれによる全世界の権力的統一の事業は二つながら完成に近づきつつある。しかしながらその完成が近づけば近づくほど人類の生命にかかわる重大な問題が起こってくる。

元来科学的探究とは思考の主体を捨象し客体を抽象化することによって成立するものであり、その自体人間生命に対する合目的性をもっていない。科学がいかに発達しようと、人生をいかに生きるかに答える力は無い。そのことが人類の今後の生命維持に重大な危機をもたらすこととなった。

その313につづく

歴史とは 35

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋



その 313

その一つは科学技術が高度に発達した結果、人間の生命に深くかかわる部分に科学のメスが加えられ、その技術の使用如何によっては人間が人間の種以外に変わる可能性さえ出てきた事である。コンピュータの発達は人間の能力の相当部分を代行し得るまでになったために、ともすればそれが全く人間自体にとって代わることが出来るが如く思われがちとなる。その管理如何では人間が機械に追い回されこき使われることにもなりかねなくなった。

生化学の研究メスが生命の遺伝子の内部に入った結果、その研究の成果は生命の種を自由に変換させうるまでになり、新生児の男女性別の産み分けも可能となり、その技術独走は人間の人間ならざる人間への転換という恐怖の現象さえ予想される事態にまで到達した。その他科学技術のもたらす人間生活の便利さの裏にひそむ異常な危険性は枚挙にいとまがないほどである。以上の予想される科学技術の独創の危険に対する決定的な精神的コントロールの方針はまだ確立されていないのである。

先に述べた如く国家民族の間の戦争は人類第二の文明である科学と産業の発展のための方便として、神工ホバが人類の背後からけしかける仕組みのあらわれである。その戦争に対して人道主義の見地から戦争反対を唱えることは、仏・儒・耶等の信仰の発生した理由からしても当然であり正当な主張ではあるが、その戦争の背後にある神の仕組みや人類歴史の全趨勢を知ること無き反戦論は片面の心理であるに過ぎない。

人道主義のみで戦争をなくすることはできない。かくて宗教的また 観念的な人道主義と生存競争とが常に共存していることがここに二千年の世のあり方であった。須佐之男命と月読の命との併存、対立する社会であったのである。かくて現在の世界は正像末と釈迦が教えたその末法の世のどん詰まりまで来てしまったのである。

その 314 につづく

歴史とは 36

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 314

新世界の幕開け

日の出が近づくほど夜は暗いという。心理学的に言えば人間の表面意識が破綻しようとするとき、その意識の奥における全人格統一の力は最も強く働くという。心理学はさらに言う。このとき意識の底に動く統一の力の趨勢や内容を汲み取り表面意識に取り入れようとする努力を人間が怠るならばついにその人間の全人格の破壊がおこると。

約三千年以前 鵜草葺不合皇朝神足別豊鍬天皇がモーゼに下した命令「人類の第二の文明である物質科学の確立とそれによる世界の権力の統一の事業は完成目前の前に迫った。と同時にこの三千年

の間の精神基調である生存競争・権謀術数の考え方だけでは人類全体の生命存続を必ずしも確保し得ない事態をも招来した。

心理学的に見ても今や人類精神転換の時である。人類の生命が危険に晒された現在、その魂の底から生き続けようと奔出するエネルギーの正体を突き止め、表面意識の中に組み入れることが生きるための必須の条件である。魂の底から湧き上がってくるものとは何か。

それもちろんそれは人類の第二文明創造の地盤となる弱肉強食の生存競争社会を醸成するために故意に隠滅された人類第一精神文明の原理 言霊布斗麻邇である。三千年間人類の潜在意識の底深く眠っていた人間精神の究極原理を呼び覚まし、自覚し、それと今や完成に近づきつつある第二の物質文明と車の両輪とすることによって第一と第二の文明の総合である第三の文明の建設を目指して出発すべき時がきたことである。

幾度も述べるごとく 戦争とは人類の第二物質文明創造促進の為方便として惹起されたものである。

人類の文明の流れは 武装強化論とか反戦和平論とかの対立をはるかに超越したもっと大きな問題である。戦争は計画された人類社会の宿業であるから、その宿業の よってきたる根源を明らかにし、戦争の意義を全面的に肯定し、その上で人類はもはや方面としての戦争を必要しないと時期に来ている事を確認するならば、戦争は自然に地上からなくなるのである。

その意識改革のためには、神足別豊鍬天皇が モーゼに命令した 世界史創造の経綸の根本原理である 五十音言霊原理の復活再認識が必須の条件である。天津日嗣天皇（あまつひつぎすめらみこと）の世界文明創造の根本原理がなければ歴史の大きな流れの中の戦争の意義の肯定はできず、戦争の肯定なくして戦争の終息はない。

その 315 につづく

歴史とは 37

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 315

新世界の幕開け

人間の第一精神文明の復活を靈的に觀取して元の先駆となった天理・黒住等の教派神道教祖であった。日本の古代に精神文明の華が咲いていた民族の輝かしい時代が実在したことを民衆に教伝した。時代が明治に入りその精神を受け継いだのが大本教であった。

先に述べた「梅で開いて松でおさめる神国の代・・・」なる出口なおのお筆先の呪文は見事に言霊の原理を表現しているものである。このような靈的先駆の雰囲気の中で実際に言葉の言の存在を知り研究に着手した方は明治天皇であった。天皇の御製の中に敷島の道とか言葉の誠の道とかいう言葉が幾多見られるが、これらの言葉は現在世間で言われるごとき ただ単なる和歌の道のことではなく、言霊

の原理を指したものである。

先著「言霊」に詳しく説明したことであるが、古代においては三十一文字の和歌の道は叙景叙情的に歌いながらその中に言葉の原理を巧みに織り込むことによって言霊布斗麻邇の修練を積む修行の方法であったのである。万葉集・古今集まで和歌にそのような歌が随所に発見されるのである。

昭憲皇太后が一条家よりお輿入れの際に、そのお道具の中に言の葉の誠の道に関する奥義書が入っており、天皇は皇后と共に布斗麻邇の存在に気付かれたと伝えられている。その他宮中の賢所に言霊布斗麻邇の原理に関する決定的な呪物があるとも聞いている。

お二方の言霊学の勉強のお相手を務めたのが山越弘道氏なる皇后付きの書道家であった。氏は著書の言霊学の師 小笠原孝次氏の師であった山腰明将氏の遺稿には古事記神代巻の神名の一つ一つに五十音言霊音がそれぞれ結び合わされている。この結び付けはひとりや二人の研究だけでは到底不可能な言霊原理の神髄であるので、宮中賢所に収められていた奥義書は多分これであろうと推察されるのである。

時は下って第二次世界大戦後著書の師小笠原孝次氏の努力によってそれまでの極めて哲学的・概念的であった言霊学が、今・此所に生きる生の人間の動いている心の学問として、自己を反省して行くならば誰もその奥義に到達する精神の科学の体系にまとめ上げられたのであった。



志ある者ならば必ず誰しも古代の日本民族があったそのままの姿で人類の第一文明の中核であった精神原理を自覚することが可能となった。アイウエオ五十音言霊布斗麻邇の原理は不死鳥のごとく現代に蘇ったのである。

その 316 につづく

歴史とは 38

島田正路氏著「古事記と言霊」より抜粋

その 316

新世界の幕開け

大本教に富士の仕組・鳴門の仕組という話が伝わっている。天孫降臨の邇邇芸尊の御后が二人いた二人姉妹で姉を石長比売と妹を木の花咲久夜比売といった 姉神は石（いは）五十葉の神すなわち言霊五十音の神であり、長い間鳴門に隠れて時を待っている。

鳴門とは音声が鳴る門のことで人間の 口腔を呪示している。妹神は木の花すなわち花が咲くごとく華やかな神であり、産業経済の花咲く物質文明を表徴している。

ユダヤ民族が物質文明創造のために世界を放浪しその輝かしい成果を引き下げて「東のしまなる聖なる山」富士山の麓に神の幕屋を建てんと日本に集まって来る出雲風土記の所謂「国引の」仕事を富士の仕組みと言う。

この姉妹二神が各自完全に仕事を遂行してこの日本で再び出会う時が第一と第二の文明の総合であ

る人類恒久平和の第三文明の始まりを意味している。

その 317 につづく